

夢へ トライ

2019 W杯

①

9月にアジア初開催のラグビー・ワールドカップ(W杯)日本大会が開幕する。W杯への初出場を目指す九州ゆかりの選手に焦点を当てた。

◇ 高校時代に日課があった。夜、眠りに就く前に決意を新たにし、目覚めと同時に誓いを立てる。絶対に視界に入るよう、紙に書いて自分の部屋の天井に貼り付けた目標。それは「日本代表になる」。まだ全国的に無名の存在だった高校入学直後から、W杯への挑戦は始まっていた。

出身地の福岡県久留米市で活動する「りんどうヤングラグーズ」でラグビーを始め、中学卒業時は同じ県内の東福岡高への進学も考えた。しかし、大声でFWに指示を出す

熊本で育んだ統率力



自身初めてのW杯出場を目指す流

SH 流大 (サントリー) 26

姿やパスの球筋に才能を感じ取った熊本・荒尾高(現・岱志高)の徳井清明監督から、「一緒に花園(全国高校大会)で勝とう」と熱心に誘われた。とのわけ、「必ず日本代表を

目指せるようにする」という言葉に心を動かされ、荒尾高に決めた。
* 高校では、部員が日頃の練習や試合で感じたことなどを

ノートに書いて、徳井監督に提出する決まりだった。1年生の時、ラグビーに対する他の部員との温度差を感じて、その悩みを書いた。徳井監督からのアドバイスは「チームのためなら言わないといけない。ただ、それを認めてもらうには、自分の行動が大事だ」。授業が終われば、教室から走って一番にグラウンドへ向かった。久留米市内の自宅から電車通学だったが、朝の練習開始より早く行き、始まるまでの時間を個人練習にあてた。それだけではない。自ら進んで落ちていたゴミを拾ったり、トイレのスリッパを並べたりも。ラグビーと直接関係のないささいなことでも、それがラグビーに通じるという徳井監督の教えを信じ、真剣に取り組んだ。

めには、誰よりも努力する姿を見せる」。帝京大では4年時に主将として全国大学選手権6連覇を達成。サントリーでは入社2年目で主将に抜てきされ、南半球最高峰リーグのスーパーラグビー・サンウルブズでも主将に。類いまれなリーダーシップは高校時代から培われた。
* 4年前、日本が南アフリカを破ったW杯イングランド大会の試合をテレビで応援し、「ラグビーを見て、初めて涙がこぼれた。選手、スタッフの努力を感じた」と振り返る。高く評価されるテンポのいいパスさばきと正確なキックに磨きをかけ、狙うのはSHのスタメンである9番の桜のジャージー。「一生に一度しかないチャンス。いいパフォーマンスをして、信頼を勝ち取りたい」。自分を育ててくれた徳井監督に、W杯で着た9番を持って帰ると約束している。
(崎田良介)